

二時間後、陸家の玉器の店内で玉菡と明珠が鴛鴦の玉環（玉の腕輪）を見ていると、突然陸大可が怒った顔で入ってきた。出迎えた玉菡は不思議そうに尋ねた。

「あら、お父様、お帰りなさい、どうしてそんな顔をなさっているの？」

陸大可はフンと鼻を鳴らすと、店員が持ってきた茶を一口すすり、大事な娘を不機嫌そうにちらりと見やった。

「どうした、またうちの商品が気に入ったのか？」

玉菡はべろりと舌を出して玉環を置くと、父親の気持ち察して慰めるように言った。

「お父様、わたしの思った通りなら、きっと昌茂源の取り立てがうまくいかなかったのね？」

陸大可は怒って卓を叩きつけた。

「むろんうまくないとも。やつらは小賢しくわざとあちこちの帳簿を合算してわしの頭を混乱させおった。さあ早く父さんに代わって計算しておくれ。うちが大徳玉から借りている分と大徳玉が昌茂源から借りている分を差し引くと、昌茂源はいくらうちから借金をしているんだ？ 全く頭に来る取り立てだ！」

父娘が帳簿の決算を始めたので明珠は急いで退出した。玉菡は裙子（スカート）の後ろから小さな手帖と小さな算盤を取りだすと、ぶつぶつ言いながら手帖をめくり、小さな算盤をパチパチとはじいて、ひどく口早に言った。

「お父様、うちが大徳玉から借りている分と大徳玉が昌茂源から借りている分を差し引くと、

昌茂源は全部でうちから十二万両の銀子を借りています！」

「ハッハ。いい子だ、なんて計算が速いんだ！ おまえがああ暴れ馬のせいで肝をつぶしたんじゃないかと心配しottaんだがな」

玉菡は小さな手帖と算盤を重ねて縛って裙子の後ろにしまい込むと、かぶりを振って笑った。「そんなに簡単に肝をつぶしたりするものですか。わたしはこれでもお父様の筆頭帳簿係なんですからね」

ひとしきり歓談した後、父親がもう怒っていないのを見極めた玉菡は、再び鴛鴦の玉環を手にとると得意げに言った。

「お父様、わたし知っているのよ、この玉環は一つしかないってこと！」

陸大可は茶をすすると眉をひそめた。

「一つしかない？ どうしてそれを知ってるんだ？」

「それだけじゃなくて、一つしかないわけも知っていますわ！」

陸大可は信じていないふりをした。

「まさか！ おまえにそこまでわかるものか。ああ、言っただら、この品物はいつの時代のものかね？」

玉菡は口を尖らせた。

「お父様ったら、娘を試験なさるおつもり？ ……ええと、これは晋代の古墳から出土したものでしょう？」

陸大可はちらりと娘を見るとわざと言った。

「違う違う、この品は現代の人間が作ったものさ。古い物を掘り出したと見えるように細工してあるのだ。おまえに何がわかる。安物だ安物だ。早く置きなさい！」

玉菡は言うことを聞かずツンとすねて見せた。

「お父様、見え透いたことを仰らないで。お父様には何人娘がおいでになって？」

陸大可は指を一本立てるとため息をつき、茶を一口すする。玉菡は口を尖らせた。

「お父様に娘は一人だけ。この玉環も一つだけ。わたしにくださらないと一体誰にあげようと仰るの？」

「ハッハ。なんだかんだ言って結局わしの物を狙っているんだな！ やらんぞ！」

陸大可は冗談めかして紛らわしたが、玉菡が地団駄を踏むやら甘えかかるやらするのを持て余し、可愛くてたまらぬといった風情で娘の頭を軽く叩いた。

「玉児、わしのお宝を手当たり次第おまえにやるといふわけにはいかんよ。よし、話の続きだ、どうしてこれが一つしかないとわかるのか、正しいわけが言えたらおまえにやろう！」

「フフ。お父様、ここ数年あちこちの州や府に連れて行っていただき、鴛鴦の玉環もいくらかは見てきましたわ。鴛鴦の玉環というものは一対であるのが普通です。それぞれの玉環に鴛鴦が一只ずつ、二つあって初めて完璧になるもの。対はすなわち再会を表し、片方しかなければ分かれを意味します。でもこの玉環をご覧になって。一対の鴛鴦が共に一つの玉環に刻んであるの。これはもともと一つだけの物なんでしょう？ お父様、これは夫婦の間でやり取りするものではないでしょう？」

陸大可がわざと物問いたげな顔をして見せると、玉菡はぼつと顔を赤らめた。

「どうしてもわたしに言わせたいんですの？」

「ハッハ。それではわしが代わりに言ってみよう。おまえの推測はなかなかだ。この玉環はな、恋人同士の贈り物に限って使うのだ。若者が意中の恋人に送る婚約の証なのさ」

玉菡は口を覆って笑うとわざと誇らしげに言った。

「お父様ほどの聡明な方が、娘のこととなると見損なっていらいっしやいますのね」

陸大可は玉環を弄びながらふと尋ねた。

「玉児や、今度の外出で手に入れた釣書、ほんとうに全部見たのかね？」

さすがに玉菡もはにかむ。

「お父様、なにを仰っているの？ わたしはお嫁になんか……わたしは一生この家にいたいんです。だってそうでしょう、わたしがいなくなってしまうたら、だれがお父様の帳簿を見るの？」

陸大可は愛しげに娘を見てかぶりを振った。

「わしとおまえを嫁になどやりたくはないが、しかし男は嫁を取り女は嫁に行く、これは人倫の大札というものだ……おまえがすばらしい婿と結婚してわしから離れずすむような、そんなうまい手があればそれに越したことはないが——」

玉菡は耳を覆ってかぶりを振り足踏みをした。

「お父様、そんな話、聞きたくありません！」

陸大可は豪快に笑って立ち上がった。

「よしよし、もう言わんよ。この玉環、おまえ、ほんとうに気に入ったのかね？」

玉菡が熱心にうなずくと、陸大可はまた惜しくなってきため息がもれた。